



東洋経済新報社
四六判
本体 1,700 円

レジリエンスとは何か

——何があっても折れない心をつくる、暮らし、地域、社会をつくる

枝廣淳子 [著]

「レジリエンス」に社会的な関心が高まっている。本誌の『子どものレジリエンス』（二〇一四年八月号）も短期間に完売したと聞く。実際に、不登校に対応する現場などで、レジリエンスの発想を生かそうとする試みがなされている。

『レジリエンスとは何か』の著者・枝廣淳子氏は、レジリエンスとは、「強い風にも重い雪にもほきつと折れることなく、しななって元の姿に戻る竹のように、「何かあってもまた立ち直れる力」だという。どの子どもも、祖父母の死や災害、両親の離婚などの大きなトラブルから、学業不振や友からの嫌がらせなどの小さなトラブルまで、心の折れそうな体験を持つ。その折、一時的な落ち込みは止むをえないとしても、しなやかな立ち直りを期待したい。そうした時に、子どもの周りにいる大人として、子どもをサ

ポートしたい。それはよいが、学業不振や嫌がらせの背景を配慮することなしに、子どものレジリエンスを信じて、励ますだけでは、単なる叱咤激励で、子どもを追い込むことになりやすい。

枝廣淳子氏は、レジリエンスを文化的な背景と絡めて、システムとして捉えることの必要性を説く。教育関係者の場合、ともすると、対症療法的にレジリエンスに着目しがちな印象を受ける。ノウハウとしての活用である。しかし、学級でのいじめを例にするなら、本人のレジリエンスを期待すると同時に、学校の規則や学級の雰囲気などの改善にも目を向ける必要がある。

枝廣淳子氏は、東京大学の教育心理学の大学院を修了し、臨床心理学などの素養の持主だが、その後、環境問題を中心とした経済学に関心を寄せる研究者であ

る。そうした背景から、本書でも、災害地での取り組み（第6章）や気候温暖化との関連（第5章）、住民による地域作り（第8章）などとレジリエンスとの関連に筆を進めている。枝廣氏によれば、企業や自治体などでレジリエンスに着目する動きが広く見られる。そして、レジリエンスが個人の折れない持続力を問題にするのと同じように、企業や社会の持続可能性を検討する「サステイナビリティ」(Sustainability) 研究も進んでいると聞く。

教育関係者は、筆者も含めて、狭い教育の世界の中で、ものごとを捉えがちである。本書を読むと、レジリエンスが大きな国際社会的なうねりであることを痛感する。そうした意味で、視野を広げる素材として、本書を推奨したいと思う。